平成13年5月1日
5月号
発行・編集
岡崎市教育委員会

今月の紙面

教育随想 …… 1
愛知教育大学教授　神谷　孝男氏
この人に聞く …… 2
深田　正義氏
羅針盤 …… 2
岩津小学校長　鈴木　育男
ふれあい …… 3
三島小　稲垣　祐子
美川中　中根　正光
特　集 …… 4
発見　体験　感動！
～変わりゆく中学校の修学旅行～
おしらせ …… 6
フォト・ヒストリー …… 8
この本を …… 8

教育随想

「生きる力」と夢をはぐくむ進路指導

愛知教育大学教授
神谷　孝男　氏

教育は、価値の実現すなわち、現実を理想に近づける人間の営みであると解される。

物質的に豊かになり、便利で快適な生活がかなえられるようになって、国民の間に、夢や理想の実現を目指すというよりも、「今日（いま現在）さえよければ」といった考えが拡大し、勤勉・実直、向上心、礼儀や規範意識が低下しているとの指摘も少なくない。

そうした状況の中で、これからの学校は、「生きる力」をはぐくむことを基本とし、特色ある教育・学校づくりをすすめることが求められている。

「生き方」の指導としての進路指導は、中学生をはじめ青少年一人ひとりが、それぞれの人生を「よりよく生きること」を支援する教育活動であり、これからは、小学校の段階から「学校の教育活動全体を通じ、計画的、組織的」に行うようにする必要がある。

さて、人間（ひと）は、それぞれの集団・社会の一員として、家族や教師、友人をはじめ、いろいろな人とのかかわりの中で生き、生活している。

「生き方」の指導に当たっては、社会規範を遵守する態度や良好な人間関係を醸成することに必要な資質や能力を育成することをベースに、将来の生活や人生に関心を持たせ、これから先、どのような生活や人生を送ったらよいかを考えさせ、健全な生き方を探究させて、自分なりの夢や希望が持てるように指導援助することが大切である。夢や希望の実現を目指して、主体的に生きようとする青少年を、家庭や地域社会の理解と協力の下で、育成していくことが今、望まれる。

（かみや　たかお）

ふるさとシリーズ

この人に聞く

ほろ酔いフォーラム主宰

深田　正義　氏

―酒蔵―一歩踏み入れると、歴史の重みを肌で感じる場所である。しかし、なぜか新鮮な空気の香りで満ちた空間でもあった。そこに「ほろ酔いフォーラム」を主宰される深田さんを訪ねた。

酒との付き合い方について、お尋ねした。

「『酒って何だ』という酒の価値観を見つけることから酒とのつき合いを始めました。そして自分自身が酒にかかわる職業をとおして、どう社会に貢献するかも合わせて考え出したのです。酒は、コミュニケーションの媒体としての力、ふるさとをつくる源となる力、この二つの力を持っています。」

人を愛し、ふるさとを愛する深田さんが、この岡崎に提案した形が、酒蔵での「ほろ酔いフォーラム」である。酒をとおして人間社会に貢献していく仕組みを考えたときに生まれたもののひとつである。始めて間もなく二年になり、毎回テーマを持ち開催している。昨夏は『さあ、夏休みだ！』をテーマとし、漫画を肴（さかな）に百人ほどで酒を飲んだそうだ。ふるさとの季節感を演出することも忘れていない。

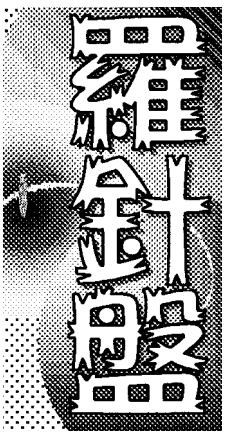
「このフォーラムは、知と心を揺さぶり日本酒を楽しみ、ふるさとに生きる喜びを分かち合うことを目的としています。生き方にテーマを持った人をゲストとし、ゲストの人生を学びます。勉強会と言えば、聞こえはいいのですが、そこに、ほろ酔いの酒が入ります。ゲストのテーマやゲスト自身をも肴にして酒を飲みます。そこには年齢や肩書きという垣根はありません。だから、いろいろな人生が交差するわけです。その場で酒はわき役となっているのです。」

人と人とがふれあう場面で、自らが主役になったり、わき役にまわったりする姿が浮かんできた。

最後に、深田さんは次のように締めくくられた。

「このフォーラムでは、自分自身も多くの勉強になりました。社会にかなったテーマを学ぶことで、視野が広がりました。そして、自分の生きるテーマを持つことの大切さを知りました。今は『人が喜ぶことのできる、ふるさとの形をつくる』をテーマに社会と自分との接点を見い出しています。」

（氏　名　ふかだ　まさよし
生年月日　昭和十九年十月二十二日
住　所　中町六丁目二の五）



歩み確かに

岩津小学校長
鈴木　育男

二〇〇一年度がスタートし、早一か月が過ぎた。情報もまたたくまに相手先へ届いてしまう世の中でもある。今、まさにＩＴの時代に生きる子供たちの元気な声が学校中に響いている。

しかし、教育に関して言えば、情報・通信技術のような速さと結果ばかりを求めてはいけない。その日のうちに理解し合わなければならないこと、数年先に気付いてくれればよいこと、あるいは、大人になってから結果が出ればよいこと等があるように思う。

さて、来年度から始まる新教育課程を目前にして、各学校では上手に移行できるように、知恵をしぼって取り組んでいる『総合的な学習の時間』がある。この時間の運用の仕方しだいで、目の前にいる子供たちの将来が決まってくると言っても過言

A男の小さな声

三島小学校　稲垣　祐子

「先生、にじが出ていたよ。」

おはようのあいさつよりもにこにことうれしそうに話してくれるA男。A男は、四年生になった。

A男とは、二年生からのつきあいである。始めは、交流学級の担任として、音楽、体育、図工、生活科を教えた。A男は、軽い多動傾向がある。こちらが話しかけても、なかなか返事がない。目が合わず、がしっとつかまえていないと、逃げようとする。けれど、私の存在は感じてくれていたようで、朝のあいさつがわりに、私のいる教室の窓をポンとたたいて行った。

A男とは、三年生になると、障害児学級「わかば」の担任として、つきあいが始まった。「わかば」は、A男にとって安心できる場所であるようだ。二年生の時には見せてくれなかった表情を知ることができた。とても生き生きと過ごしている。そして、少しずつ私との距離も縮まり、今では、交流学習や学級のことを話してくれるようになった。

「先生、砂場で川を作ったよ。」

「先生、とび箱が跳べたよ。女子が二人まだ跳べないよ。」

A男の小さな声を聞き逃さないように、耳を傾けていきたい。

生活を振り返る

美川中学校　中根　正光

「今年のカルチャーウォークって、名古屋で自由なの。」

やんちゃなA男が二学期早々に質問をしてきた。本校では、毎年カルチャーウォークと銘打って秋の遠足をしている。二年生は、名古屋市内の班別見学活動をしており、今年の生徒も楽しみにしていた。しかし、行事が重なった関係と、普段の学校生活の様子を見ていて、職員間で班別活動をさせることに異議が出された。この考えにA男は反発した。

そこでカルチャーウォークを行うにあたり、二年生の議員会を開き、現在の自分たちの生活を振り返るところから話し合いを進めた。「言うことを聞かない子がいると班長がかわいそう」「時間のけじめがない」など、多くの意見が出された。そして、生徒たち自身が班別活動は難しい、と考えるようになった。そこで、遠足は南知多のアスレチック広場に変更し、A男をはじめとし、生徒たちでルールを決めた。

当日は我々の不安をよそに、A男はもちろん、元気よく広場で活動する生徒の姿があった。ルールを生徒自身に考えさせる良い機会となった。

ではないだろう。

なぜなら、よくちまたで、「親を何とかしなきゃ…」という言葉を耳にする。思い起こせば、その親たちが小中学校の時、私たちがかかわっていたからである。

約十年のサイクルで学習指導要領が改訂されてきているが、前回の改訂で「楽しい授業をしよう」というキャッチフレーズが広がった。そして、例えば、子供たちが「ドッジボールがやりたい」「今日は天気がいいから自然観察に行こうよ」と言う声に押されたこともあり、『子供たちが、ただ、楽しければいい』と解釈をした時期があった。この時代、私たちはどのような授業を組み立てていたであろうか。

総合的な学習の時間を実践するにあたり、子供の実態を確実に把握すると共に、教師と子供たちが何を求めているかについて、全職員の共通理解が必要である。その上で『歩み確かに、ふみしめ、ふみしめ』着実に歩を進めることが、成功への鍵であると考える。

二十一世紀を背負っている子供たちの十年後、あるいは二十年後の姿を期待したい。

発見　体験　感動！

▲夢を書いた風船ー葛西臨海公園ー（東海中）

変わりゆく中学校の修学旅行

時代と共に中学校の修学旅行も少しずつ変化してきている。学年全体の一斉行動から、学級別に見学地を選択したのは、昭和五十五年の矢作中学校が最初であった。十年ほど前からは、観光を中心とした旅行から、班別にテーマに添って取材したり、体験したりという学校が多くなってきた。

内容も訪問先も多種多様である。都庁や警視庁、各国大使館などの官公庁での取材、プロレスやボクシングジム、相撲部屋などのスポーツ施設での体験、テレビ局や出版社、証券会社などの訪問先が挙げられる。首都東京でしか味わえない体験も多い。また、一人一人が自分の夢を風船に書き、葛西臨海公園から全員で飛ばした学校やペンションのオーナーとの交流を深めた学校もあった。常磐中学校では、「生き方発見チャレンジ活動」をテーマに総合的な学習の時間の一環として数人の班別課題追究学習を実施している。

体験を取り入れた修学旅行は、訪問先との交渉や交通手段な

▲新宿区協栄ジムでのスパーリング（南中）

▲亀戸での江戸切子の製作体験（岩津中）

▲市ヶ谷　防衛庁での取材（城北中）

▲日光東照宮でのインタビュー（常磐中）

▲月島でのケーキ作り（矢作北中）

▲池袋防災館での心肺蘇生法体験（新香山中）

修学旅行班別課題追究学習テーマ一覧（常磐中）

- みんなが知らない雑誌の裏側
- 最近のはやり…どう着こなせるか！
- 我らの道はマンガにあり
- 声優への道
- 美容師になりたいぞ！
- 保母さんになりきろう！
- 動物と環境を守ろう
- 環境にやさしい自動車
- しながわ水族館の裏側
- その店独自のもんじゃを探ろう！
- レコード会社は何するところ？
- ゲームのおもしろさとその魅力
- 撮影現場を見学するぞ
- 番組ができるまで
- ロボット完全攻略法！
- 映像技術の進化
- 働くことの難しさ
- 日本と外国との関係
- 雑貨のデザインについて
- 東京の流行を探ろう

ども生徒自身が検討するので、計画や事前の準備に時間がかかる。しかし、自分たちの決めたテーマや関心のある訪問先が選択できるので、目的意識を持って参加できる。修学旅行後、旅行記やパネルで体験したことをまとめる学校が多い。なかには、パソコンを使って旅行のまとめをし、文化祭で全校生徒の前で発表した学校もある。

修学旅行記には次のような文章がみられた。

・富士山の懐に抱かれた青木ケ原樹海を汗を流しながら歩き、自然と触れ合う中で、友の意外な面を発見し、友達の輪が広がった。

・声優になるためには、思っていたよりもたくさんのことを学ばないとなれないものだった。私も将来の夢に向けてもっと自分にできることを積極的に頑張っていこうと思った。

・東京での美容師体験を通じて、将来の自分と向き合うことができた。

単なる観光に終わらず、生徒が主体的に取り組む修学旅行は、まさに「自分探しの旅」として、生徒に新たな発見や感動をもたらすものといえるだろう。

▲船橋競馬場厩舎（きゅうしゃ）の訪問（矢作中）

▲河口湖でのペンションオーナーとのふれあい（六ツ美中）

お知らせ

●教育研究所だより

新世紀に生きる子を育てる

所長　福應　謙一

朝早い散歩の途上で、母親に見送られて登校する中学生に出会った。にっこり微笑んで親元を離れ、擦れ違う私に「おはようございます」の心地よいあいさつをして通り過ぎていった。心弾む一日のスタートである。

そういえば、この子の以前の姿は違っていた。小学校の時は不登校ぎみであったことを思い出した。中学校に進んでからもしばらくその傾向は続き、始業時刻近くにしぶしぶ出掛け、通学途中まで保護者が付き添っていくこともあったと聞く。

この子を、何がどのように変化させたのかは詳しくは分からないが、母親の熱意と本人の意欲、学校や地域の温かい励ましがあって、好転の傾向が見られるようになったのであろう。さらなる飛躍を陰ながら願うところである。

岡崎市では、この四月から臨床心理士を導入して、相談や指導にあたっていただくことにした。学校の先生方や保護者の努力、地域の方々の協力に加えた大きな力となることと期待している。

そよかぜ相談室

岡崎市就学指導委員会は保護者との面談を以前から行っていた。その中で、気軽に相談できる場所がほしいという要望が多くあり、就学指導委員会としても、より多くの方と面談することで、就学指導に対する理解を広めていけたらという願いを持った。

双方の願いをかなえる形で平成六年度より『そよかぜ相談室』が開設された。さらに平成十年度から教育研究所内に受付窓口、十一年度からは教育相談室を常設していただき、相談を受けている。『そよかぜ相談室』は、就学についての悩みを持つ保護者から申し込んでいただき、就学指導委員会の委員や協力員が相談にあたっている。

今後は、担当相談員を中心に対応することで、常時相談が可能となる。在学児についても相談を受付けているので、相談の必要な保護者への啓発を勧めていただきたい。

臨床心理士による不登校相談室開設！

四月一日、教育研究所に不登校相談室を開設した。この相談室では、心理的な問題を取り扱う心の専門家「臨床心理士」が相談活動を行っている。教育研究所では、臨床心理士の大津直樹さんが相談に応じている。

教育研究所へ電話で相談の申し込みをすれば、不登校児童生徒及びその保護者への専門的なカウンセリングや、担任の先生への適切な指導・助言が受けられる。

相談日時は次のとおり。

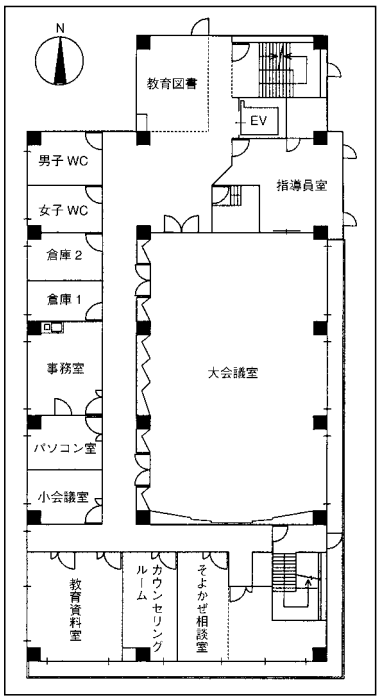
○毎週水・金曜日（祝祭日は除く）

○午後一時から五時まで

TEL　二三―六九九三

FAX　二三―六九五一

学校へ行きたくても行けない児童生徒を救うために、是非とも活用いただきたい。



若宮庁舎3F　岡崎市教育研究所平面図

●ハートピアだより

電子メールの交換

ハートピア岡崎にはデスクトップ型パソコンが一台ありホームページを開設し、メールの交換もできる。

子供たちが予想以上に使うことができ、順番を待つくらいよく利用されている。

中二女子Aさんは、小学校の校長先生とメール交換ができ、うれしくて自分の中学校の校長先生、そして担任の先生へと広げていった。Aさんは、電子メールがきっかけとなって学校に行けるようになり、「三年になったら毎日学校に行く」と言い、自然教室にも参加した。

中一男子B君が、ある朝、「きのう、学校に行ってきた。幾人もの友達がメールで誘ってくれたので」と、担当者を驚かせた。

これからもハートピア岡崎の子供たちが学校に向けてメールを発信することがあるだろう。先生や友達とのメールの交換を待っている。

《メールアドレス》
hartopia@sinfonia.or.jp

◆平成十三年度校長会役員

〈小中学校長会〉
会　長　大井正之（新香山中）
副会長　山本廣子（藤川小）
　　澤　博史（葵　中）
　　鈴木正純（六美北小）
顧　問　加藤一彦（常磐南小）
会計監査　内藤廣光（梅園小）
　　二村邦彦（矢作中）
庶　務　鈴木敏雄（大樹寺小）
　　柴田隆夫（矢作北中）
庶務補佐　鶴田紀美子（六美中小）
会　計　杉浦博司（連尺小）
　　藤田吉信（六美中）
会計補佐　平野有行（竜海中）
評議員　石原紘二（生平小）
　　松井幸彦（緑丘小）
　　杉浦正明（竜美丘小）
　　三津井秀夫（細川小）
　　榊原正樹（三島小）
　　篠田英昭（矢作北小）
　　名倉昭人（男川小）
　　本多有三（矢作東小）
　　上川清玄（矢作西小）
　　筒井一夫（南　中）
　　石川春次（城北中）
　　牧野好博（美川中）
　　中島　泰（六美北中）
　　梶尾長夫（甲山中）
　　浅井昭二（岩津中）

〈小学校長会〉
会　長　山本廣子（藤川小）
副会長　鈴木正純（六美北小）
　　鈴木敏雄（大樹寺小）
会計監査　内藤廣光（梅園小）
庶　務　鶴田紀美子（六美中小）
会　計　杉浦博司（連尺小）
会計補佐　杉浦正明（竜美丘小）

〈中学校長会〉
会　長　澤　博史（葵　中）
副会長　筒井一夫（南　中）
　　石川春次（城北中）
会計監査　二村邦彦（矢作中）
庶　務　柴田隆夫（矢作北中）
会　計　藤田吉信（六美中）
会計補佐　平野有行（竜海中）

〈専門委員会委員長〉
法　制　平野有行（竜海中）
理　財　鈴木　忍（秦梨小）
給　与　金子一元（小豆坂小）
文　教　杉浦博司（連尺小）
進　路　河合好文（竜南中）
研　修　梶尾長夫（甲山中）
保　体　鴨下智幸（福岡小）
福　安　菅沼　剛（東海中）
給　食　加藤忠彦（河合中）
広　報　名倉昭人（男川小）
生徒指導　牧野好博（美川中）

◆平成十三年度研究発表校

・六月一日　矢作東小
「確かで豊かな音声言語表現力を伸ばす指導」
・六月二十二日　六ッ美中部小・六ッ美中
「異年齢交流ではぐくむ豊かな心―小中連携を通して―」
・九月二十八日　矢作西小
「自然や人に進んでかかわっていく感性豊かな子の育成―みどりチャレンジタイム『生活科・総合的な学習の時間』を中心として―」
・十月三十日　藤川小
「メディアを利用して追究する子の育成」
・十一月九日　新香山中
「互いの良さを認め合い、進んで実践する生徒の育成―関わり合い、認め合い、分かり合う―」
◇授業研究協議会
・六月十五日　竜海中
「自ら追究し、自己向上をめざす生徒の育成―教科学習を中心に―」

◆平成十三年度教育委員学校訪問

・五月十日　常磐東小
・五月二十四日　竜谷小
・六月二十八日　三島小
・九月二十七日　城北中
・十月四日　羽根小
・十月十八日　矢作幼稚園
・十一月一日　矢作北中
・十一月十五日　常磐中
・十一月二十九日　六名小
・一月二十四日　広幡小
・二月七日　矢作南小
・二月二十一日　小豆坂小

本年度より主事訪問も予定します。

◆平成十三年度特別委員会

・市民大学運営委員会
・月報「岡崎の教育」編集委員会
・教員の研修に関する委員会
・教育課程研究委員会
・評価委員会
・学校環境緑化推進委員会
・郷土読本編集委員会
・野外活動委員会
・情報教育推進委員会
・行事・部活動研究委員会
・完全学校週五日制研究委員会

▲現職教育委員会総会
―連尺小学校・城北中学校　4月16日―

フォト・ヒストリー 岡崎の教育

石張りのプール
（昭和35年）

・カット　矢作西小　長谷川　勝一

写真提供　矢作北小学校

本市の学校プール建設は、昭和十一年の連尺小学校において始まる。昭和二十五年には、葵中学校に長さ五十メートルのプールが完成した。このころの各校のプールは貯水池を兼ねたものが多く、付属施設も不十分であった。

写真は昭和三十五年の矢作北小学校の石張りのプールである。昭和二十五年の建設当時は石垣造りであった。建設のために学区総代会を中心に、消防団や青年団が資金集めに奔走し、土掘りや石垣積みは学区の奉仕作業で行われた。

当時は、他の学校でも、学区からの強い要望と協力があって初めてプールは完成したのである。

オアシス

おととしの新入生が今年は最高学年。中学校の中心となって活動し始めた。僕らの時代とばかりに活躍の場を見つけ、喜びいっぱいの生徒たち。スパイクされたバレーボールにも勢いがある。この一年が勝負と決め、夢に向かって走り出した。健闘を祈る。

新世紀にふさわしい教育を目指した「21世紀教育新生プラン」。二〇〇一年を教育新生元年と位置付け、「教育が変わる」ための具体的な施策や課題が明らかにされた。教育改革への取り組みの全体像が示されたことで、教育も今新しい時代を迎えようとしている。

あらたふと青葉若葉の日の光　芭蕉

新緑が日の光を受けて、美しく輝く五月。芭蕉が奥の細道への紀行で日光に立ち寄ったのは、今から三百年以上も前のことである。しかし、芭蕉が「あらたふと」―神聖―と感じた初夏の太陽は、今も若葉を照らしている。

透き間なく並んだ酒瓶がフォーラムの会場をにぎやかに飾る。一杯の酒がその場を和やかにし、心を潤す。人間の内面に潜む面白さを引き出し、人生のわき役を演じる酒について熱っぽく語る深田さん。歴史の重みある酒蔵に、ふるさと岡崎の香りが漂う。

この本を

＊危ない少年　町沢　静夫
講談社　¥1300

＊いま魂の教育　石原慎太郎
光文社　¥1200

＊天国への階段　（上・下）　白川　道
幻冬舎　各¥1700

＊聖　水　青来　有一
文藝春秋　¥1333

＊私の教育観　教育ジャーナル編集部
学習研究社　¥1800

月刊誌「教育ジャーナル」に載った各界で活躍する37名の著名人が、小中学校時代の恩師の思い出、天職を得た動機、教育問題に対する感想や提言をまとめたものである。「子供のころの先生の一言が思っている以上に大きいものなのです。先生が思っていらっしゃるよりは、先生の言葉を子供は長く長く覚えていることを忘れないように、悔いがない教育をしてほしい」と、櫻井よしこさんは提言する。人が人をつくるという教育の営みの重大さを再認識させられる。